

報 告

第 60 回日本歯科理工学会学術講演会報告

平成 24 年 10 月 13, 14 日の両日, 第 60 回日本歯科理工学会学術講演会が九州大学大学院歯学研究院生体材料学分野・石川邦夫教授に大会長の労をとっていただき, 同大学医学部百年講堂で開催された. 幸い天候にも恵まれ大きな崩れがない中で 2 日間の研究・発表講演会となった. 特別講演は「ソフトマテリアル界面の示す特異的な表面・界面物性と歯科材料分野への展開」と題し, 九州大学先端物質化学研究所の高原 淳教授に御講演をいただき, 生体材料としての研究が主流となってきた本会に, 異なる分野から興味深い話題をご提供いただいた. 他に約 140 題と多数の一般口演で学術講演会が行われた.

今回の第 60 回大会は「日本歯科材料器械学会」と「歯科理工学会」の統合から 30 年目を迎えた記念すべき大会でもあり, 創立 30 周年記念祝賀会が 13 日の夕刻より通常の懇親会の枠で併催された. 記念祝賀会では歴代の日本歯科理工学会長職を務められた先生方に協会長より感謝状が贈呈され, また日本歯科医学会をはじめとした関連各歯科学会および多年にわたり貢献をいただいている歯科材料・器械の各企業の方々にも御臨席を賜り, 日頃の懇意あるいは厚情に感謝の意を表するとともに多くの謝辞をいただくなど盛りだくさんなセレモニーが企画され, 宴席はたいへんな盛り上がりであった. さらに, 理工学会は今春の第 59 回学術講演会総会で正式に一般社団法人への移行が決定し, 翌 14 日に臨時設立総会も執り行われるなど, 理工学会としてはまさに新しい歴史へと第一歩を踏み出した学術講演会となった.

60 回記念大会では第 49 回大会以来久々に口頭会場を 2 会場にセッティングしたのが目を惹いた. 講演内容を分かりやすく発表するには口頭の方がよいとの判断だと伺ったが, 特に若手にとってはポスター発表よりも口頭発表の方が緊張感もあり, 次世代の研究者を育てる意味からも多くの聴衆に自らの研究内容を告知できるので意味がある試みではある. 今回は演題数が多かったので口頭発表が A 会場 32 題, B 会場 33 題でポスター発表が 74 題と全体的に配分が良かったように思われた. 以前に 2 会場で行った頃はレジン中心の有機材料とセラミックス・金属の無機材料に分かれ, 自らの研究に近いところでの発表・討論が繰り返されていたが, 最近の傾向としてコンピュータ化やバイオ系に関する演題が増加しているためになかなか明瞭な区分けが難しく, プログラムを組むのも簡単ではないことが察せられた. 講演プログラムは大会長に一任ではあるが, 年開催の回数とともに今後の大会運営のあり方にも一石を投じるものとなった感がある.

第 60 回記念大会という, 普段以上に式典の趣をも盛り込んだ学術講演会開催であったが, 注力された大会長の石川邦夫教授, 準備委員長の都留寛治准教授はじめ, 関係各位に深く感謝の意を表したい. 来年春は 2010 年春季大会以来の関東支部の当番となるが, 関東開催としては恒例のタワーホール船堀で 2013 年 4 月 13, 14 日に昭和大学・宮崎 隆教授が大会長を務め開催されることが決まっている. 新たに一般社団法人日本歯科理工学会としてのスタートとなる学術講演会・総会である. ぜひとも多数の先生方にご参加をいただけるよう, お願いを申しあげる.

玉置 幸道

(昭和大学歯学部歯科保存学講座歯科理工学部門)

